

日蓮大聖人御書全集

きとうきょうおくりじょう

祈禱經送状

新版  
1785  
）  
1787

# 祈禱經送状

ぶんえい ねん がつ にち さい さいれんぼう

文永10年(73) 1月28日 52歳 最蓮房

ぎよさつ むね いさいうけたまわ そうら お か

御札の旨、委細承り候い畢わんぬ。兼ねてはまた、

まつぼう い ほけきよう たも そうろうもの さんるい べうてき こうむ そうら

末法に入つて法華經を持ち候者は三類の強敵を蒙り候

めんぱい とき おおむねもう そうら お ほとけ きんげん

わんことは、面拜の時、大概申し候い畢わんぬ。仏の金言

そうろううえ ふしん いた そうろう

にて候上は、不審を致すべからず候か。しからば則ち、

にちれん ほけきよう しん たてまつ そうら のち こうべ すなわ

日蓮もこの法華經を信じ奉り候いて後は、あるいは頭

くず こうむ う お

に疵を蒙り、あるいは打たれ、あるいは追われ、あるいは

くび ぎ のぞ るざい そうら けつく

頸の座に臨み、あるいは流罪せられ候いしほどに、結句は

しま おんる そらら  
この島まで遠流せられ候いぬ。

じゆうざい もの げんざい ざいか そらら  
いかなる重罪の者も現在ばかりこそ罪科せられ候え。

にちれん さんぜ だいなん あ そらら ぞん そららう ゆえ  
日蓮は三世の大難に値い候いぬと存じ候。その故は、

げんざい だいなん いま かこ なん どうせい しまにんとう もう  
現在の難は今のごとし。過去の難は、当世の諸人等が申す

によらいざいせ ぜんしよう くぎやりとう だいかくにん じゆうざい  
ごとくば、「如来在世の善星・俱伽利等の大悪人が重罪の

よじゆう しつ によらい めつご う  
余習を失せずして如来の滅後に生まれて、かくのごとく

ぶつぼう かたき もう そららう つぎ みらい なん もう  
仏法に敵をなす」と申し候これなり。次に未来の難を申

そらら どうせい しまにん ぶるいとうぼう そらら よう  
し候わば、当世の諸人の部類等謗じ候わん様は、「この

にちれんぼう ぞんしよう とき しゆじゆ だいなん 遭 しもん おもむ とき  
日蓮房は、存生の時は種々の大難にあい、死門に趣くの時

は自身じしんを自ら食みずかして死じきぬる上しは、定うえめて大阿鼻地獄だいがびじごくに墮だ在ざい

して無む辺へんの苦くを受うくるらんと申もうし候そうらわんずるなり。

古いにしえより已このかた来せけん、世間しゆつせ・出ざいか世ひとの罪科きせんじようげの人じかい、貴き賤せん上下じようげ、持じ戒かい・

毀き戒かい、凡ぼん聖しやうに付つけて多おほく候そうらえども、たげんざいだそれは現げんざい在ざいばか

りにてこそ候そうらうに、日蓮にちれんは現げんざい在ざいは申もうすに及およばず、過か去こ・未み来らい

に至いたるまで三さん世ぜの大難だいなんを蒙こうむり候そうらわんことは、たにちれんだひとえ

に法華經ほけきやうの故ゆえにて候そうらうなり。日蓮にちれんが三さん世ぜの大難だいなんをもつて、

法華經ほけきやうの三さん世ぜの御利益ごりやくを覚おぼしめされ候そうらえ。過か去こ久遠劫くおんごうより

已このかた来みらい未えい来ごう永劫みやうほうれんげきやうまで、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの三さん世ぜの御利益ごりやく尽つくくすべか

そろう

にちれん

ほけきよう

かとうど

しょうぶんつかまつ

そろう

らず候なり。日蓮が法華經の方人を少分仕り候だに

だいなん

あ

そろう

しゃくそん

せせばんぼん

も、かようの大難に遇い候。まして釈尊の世々番々の

ほけきよう

おんかとうど

おも

や

そろう

どうりもう

法華經の御方人を思い遣りまいらせ候に、道理申すばか

そろう

かんじほん

せつそう

ざんじ

はい

りなくこそ候え。されば、勸持品の説相は暫時も廃せず、

たつと

おぼ

そろう

ことさら、ことさら、貴く覚え候。

いち

おんやまご

おんこころざし

まつぼうしやくぶく

ぎよう

一、御山籠もりの御志のこと、およそ末法折伏の行

そむ

びようしや

おわ

そろううえ

てんか

に背くといえども、病者にて御座しまし候上、天下の

さい

こくど

なんごうじよう

そろう

とき

わ

み

抓

し

そろう

災・国土の難強盛に候わん時、我が身につみ知られ候わ

ほか

もう

そろう

こくしゆしん

ざらんより外は、いかに申し候とも国主信ぜられまじく

そろうら にちれん ろうきよ こころざしそろうら ごぶん おんこと

候えは、日蓮なそろうらお籠居の志候。まして御分の御事は、

せんごく ろうきよそろうら おんやまい

さこそ候わんずらめ。たとい山谷に籠居候とも、御病も

へいゆ びんぎ よ そろうら しんみよう す ぐつう

平癒して便宜も吉く候わば、身命を捨てて弘通せしめ給

たも

うべし。

いち おお こうむ そろうらまつぼう ぎようじやそくさいえんめい きとう

一、仰せを蒙り候末法の行者息災延命の祈禱のこと、

べっし いっかんしる まい そろうら まいにちいっぺん けつじよな どくじゆ

別紙に一卷註し進らせ候。毎日一返、闕如無く読誦せら

そろうら にちれん しん はじ そうら ひ まいにち

るべく候。日蓮も信じ始め候いし日より、毎日これらの勘

もん じゆ そろうら ぶつてん きせい そろうら しゆじゆ だいなん

文を誦し候いて、仏天に祈誓し候によりて、種々の大難に

あ ほけきよう くりき しやくそん きんげん じんじゆう

遇うといえども、法華経の功力、釈尊の金言、深重なる故

ゆえ

に、いま 今まで相違無く候なり。そういな そうろう

それにつけても、法華経の行者は、信心に退転無く、身に

詐親無く、一切法華経にその身を任せて金言のごとく修行

せば、たしかに後生は申すに及ばず、今生も息災延命にし

て勝妙の大果報を得、広宣流布の大願をも成就すべきな

り。

一、御状に「十七出家の後は、妻子を帯せず、肉を食せ

ず」等云々。権教を信ぜし大謗法の時のことは、いかなる

持戒の行人と申し候とも、法華経に背く謗法の罪の故に、

しょうほう はかい だいぞく ひやくせんまんばいおと そうろう か ほう

正法の破戒の大俗よりも百千万倍劣り候なり。彼の謗

ぼう びく じかい むけん お しょうほう だいぞく

法の比丘は、持戒なりといえども無間に墮つ。正法の大俗

はかい じょうぶつうたが ゆえ

は、破戒なりといえども成仏疑いなき故なり。ただし、今

おんみ ねんぶつとう ごんきよう す しょうほう き たも ゆえ いま

の御身は念仏等の権教を捨てて正法に帰し給うが故に、

まこと じかい なか しょうじよう しょうにん びく な

誠に持戒の中の清浄の聖人なり。もつとも、比丘と成つ

ごんしゆう ひと しょうほう

ては権宗の人すら、なおしかるべし。いわんや正法の

ぎょうにん ごんしゆう とき さいし だいなん

行人をや。たとい権宗の時の妻子なりとも、かかる大難に

あ とき ふ す しょうほう ぐつう

遇わん時は、振り捨てて正法を弘通すべきのところ、

じたい しょうにん よ よ

地体よりの聖人、もつとも吉し、もつとも吉し。

あいかま

あいかま

きようこう

ふさいとう

よ

きた

おんり

相構えて相構えて、向後も、夫妻等の寄り来るとも遠離

いっしん

しょうげな

こくちゆう

ほうぼう

責

しやくそん

けぎ

して、一身に障礙無く、国中の謗法をせめて釈尊の化儀を

たす

たてまつ

きようこう

いっかん

ぜん

資け奉るべきものなり。なおなお向後は、この一卷の書

じゆ

ぶつてん

きせい

ごぐつうあ

そうろう

そうろう

を誦して仏天に祈誓し、御弘通有るべく候。ただし、こ

しよ

ぐつう

こころざしあ

ひと

きよう

の書は弘通の志有らん人にとつてのことなり。この経

ぎようじや

きよう

あた

もの

そう

の行者なればとて、器用に能わざる者には、左右なくこれ

じゆよ

そうろう

きようきよう

を授与すべからず候か。あなかしこ、あなかしこ。恐々

きんげん

謹言。

ぶんえいじゆうねんみずのととりしようがつにじゆうはちにち

にちれん

かおう

文永十年癸酉正月二十八日

日蓮

花押

さいれんぼうごへんじ  
最蓮房御返事